

模擬国連人権理事会・普遍的定期的審査（UPR）大会報告

【概要】

日時：8月11日（日）～14日（水）

場所：韓国・ソウル市・高麗大学校

参加大学：西南学院大学、国際基督大学、香港城市大学、高麗大学校ほか

共催：Human Asia、国際基督大学、香港城市大学、高麗大学校

使用言語：英語

本大会は、韓国、北朝鮮、中国、日本における人権問題について、UPR 手続における「建設的対話」をシミュレーションする形でディスカッションを行なう。他の地域人権条約システムでは裁判所を有していることもあり模擬裁判が盛んだが、条約制度がない東アジアでは「建設的対話」の形式が非常に重要と認識されている。緻密な国際法議論というよりも、ある種の「模擬国連」として外交ロールプレイが体験できることから、外交官を目指す学生にとっては模擬裁判に並んで需要のある取り組みである。

【西南学院大学から参加した学生】

法学部 国際関係法学科 4年 20am077 世継祐介（日本政府代表）

法学部 国際関係法学科 2年 22AM043 宮本ひかる（Outstanding Delegation Award 受賞）

法学部 国際関係法学科 1年 23AM01 尾崎里奈

【コーチ（根岸陽太）からの報告】

下記に添付した感想文から分かるように、建設的対話を信念とする国連人権理事会のUPR手続の体験を通じて、将来の東アジア地域の人権保障に貢献しうる知見とともに、国内外の同世代の学生とのネットワークを構築する機会も学生にもたらしうることができた。学生たちは自分たちの国々を代表する立場を演じることになったが、何不自由ない生活を送っている自国の生活のなかに様々な人権問題が隠されていることに気づき、他者の視点を踏まえて相対的に自省する視点が身につけていた。また、底なし的に悪化を続ける日韓関係や香港でのデモ活動による空港封鎖など、今まさに激動する東アジアの情勢において本大会が勇気を持って開催されたこと自体が本当に意義深いものであった。運営側の献身的な努力の甲斐もあり、学生たちは自分たちが置かれている状況について言語や文化の壁を超えて意見交換を行うことができた。大会後の8月14日には、日本の植民地支配からの独立と戦後の独裁政権からの民主化を象徴する西大門刑務所を参加者全員で訪れ、「日本軍慰安婦被害者を讃える日」（14日）と光復節（15日）の真っ只中で反日感情が高まるなかで、歴史問題・教育について多くのことを考えさせられる経験も持つことができた。

I-Model UN UPR に参加しての感想

20AM077 世継祐介

私はUPRを通して、人権について座学だけではなく、外国の学生との対話を通して学ぶことができました。そもそも私がこの模擬国連に参加しようと思った理由は、人権という万人が共通して持っている権利を法学部の学生として、自ら能動的に学んでみたいと思ったからです。今回はICUと西南学院と2つの大学で共通のテーマに取り組むという方法で準備を進めました。学内でも議論を重ねたり、よりよいアイデアを出し合ったりすることは難しいので、ICUと西南とは地理的にも離れており、法学部の学生ではない方たちと連携をとれるのか不安でした。しかし、実際に準備を進めていくと、同じ授業を受けていない分、いろいろな視点からのアイデアを出しえて楽しい議論をすることが出できました。人権についての模擬国連は必ずしも法律論では進行しません。例えば私が担当したテーマである「Technology and the right to privacy」に関していえば、マイナンバー制度に関する個人情報の管理体制や個人情報保護法はうまく機能しているのかといったような、法律をケースにあてはめて回答を導き出すといった座学的な回答ではない、現実の問題を総合的に考慮した回答が求められました。人権に関する論点は、宗教、倫理、文化、政治など多岐にわたるので一人のリサーチでは賅えず、協力を通してアイデアを出し合うことでいろいろな視点からのアイデアが集まり、難しい問題に対して協力して取り組む姿勢をこの経験を通して学ぶことができました。

また、私は今回の日本代表として参加しました。日本代表として5つのテーマすべてを要約して、他国から出た recommendation を踏まえ、日本政府としての今後の方針を模擬的に Outcome report として発表をするという役を担いました。そこでは、日本の10人の参加者から要約をきいて、全員の意見を聞きながら政府としての模擬の方針を固め、発表を行いました。模擬ではありつつも日本代表という重役をにないプレッシャーも感じましたが無事やり遂げることができ自信につながりました。

私が所属しているゼミでは国際私法を主に勉強しており、英語や知識面でも公法分野である人権についての大会に参加することには不安がありました。しかし、実際に終えてみると海外の学生と話す話題も教育や人権といった公法的なものにも広げられるようになりました。そういったテーマは万国共通で大事なものなので、その話題を英語で深められるようになったことで、会話を通して人とのつながりもより強く築けるようになったと感じました。

UPRにより、勝ち負けではなく建設的な対話として意見を出し合い話し合う力、国内だけではなく世界的な普遍的な視点から、一つのテーマを考える力がより身についたと思います。この経験を今後の学習や学校生活でも生かして、よりよい学生生活を送り、この学びを周りの環境にも還元できるよう努めてまいりたいと思います。

UPRに参加して

法学部国際関係法学科2年

22AM043 宮本ひかる

・参加動機

今回、UPRに参加した理由は、UPRの内容が建設的対話を行うという点と大会での使用言語が英語であり、日本・中国（香港）・韓国の学生が大会に参加するという国際的な点に魅力を感じ参加を希望しました。1点目について、私自身、将来、外交に関する職業に就きたいと思っています。この大会では、建設的対話をすることによって、外交的なアプローチを身に着けることができ、また、法的なアプローチだけではなく、政治的・経済的な側面から各国の状況を見て建設的な対話をするという点に魅力を感じました。2点目について、私自身、7月に東京で行われた国際法模擬裁判大会（国内大会）に参加し、他大学の大学生と交流することで、自分自身のレベルを知り、学習の意欲が上がり、今後の学習についての指針を明確に立てることができました。このような経験から、国際的な大会にも参加し、アジアの素晴らしい大学生に出会いたいということと、その方々と交流し、もっと多様な視点や考え方を身に着けたいと思いました。また、将来外交的な仕事に就くうえで英語は必要不可欠であり、その英語を用いて政治や経済、政策などの専門的な用語を使用して対話を行いたいと思ったからです。

・大会

今回の大会では、西南学院大学の学生だけでなく、国際基督教大学の学生と一緒にチームJAPANとして参加しました。そのため、大会までのやり取りはスカイプでの会議やSNSでのやり取りがメインとなり、連絡を取ることが難しく準備が期日までに間に合うか多々不安な面もありました。しかし、実際に現地に行ってから、大会の前日の夜も、大会期間中の夜もギリギリまで発表内容や質問内容について検討し、意見を交わしました。特に、パートナーとは夜中まで、このUPRは何を目的として開催されるのか、この質問をしたらこの国の人権問題や政府の見解はより良いものになるのか、私たちの立場だからこそ質問できることは何なのかなど、根本的な点についても何度も討論したことが強く印象に残っています。大会本番でも臨機応変に対応ができたのはお互いにその根本的な考えが一致していたからだと思っています。一方で、言語の壁というものが私にとって最大の問題でした。大会が始まる前や食事の時など、いわゆる日常会話はできるのですが、やはり、大会で話す英語は私にとって全く別物のように感じました。この点については、大会期間中とても悔しい思いをし、今後の私の最大の課題です。

また、今回の大会を通して、発表の内容を考えるうえで、法的なものについてももちろん考えましたが、政治的な面や経済的な面についても調べました。主に、日本の各省庁の

ホームページを参考にしましたが、調べていくうちに、自分がいかに日本の状況について知らなかったか、そして、そもそも関心がなかったのか痛感しました。私は今回の大会で人権問題の中でも特に、「障がいを持つ人々の権利」についての発表を担当しました。女性の権利や子供の権利などについては私自身身近な問題であったため、これまでも様々な文献に触れる機会がありましたが、「障がいを持つ人々の権利」について、国がどのような対策をとっているのか、どのくらいの予算を設定しているのか、そして、そのような国の政策は果たして、障がいをもつ人々の暮らしを良くしているのかについては考えたことがほとんどありませんでした。そのため、今回この大会に参加し、この分野を担当し、この分野の問題について、国の方針について、知ることができ、新たな視点と問題意識を持つことができたため、大変良かったと思っています。

・その他

今回の大会に参加し、開催地である韓国について知ることができたことは私にとって大きなものでした。現在の日韓の緊迫した状況のなか、韓国に行き、少しピリッとした緊張感があったように思えます。ですが、大会を通して仲良くなった韓国人の友達と今回のデモについて話をすることで、お互いに理解を深めることができたと思います。

また、大会最終日にソウルの西大門刑務所を訪問し、とても胸が痛みました。しかし、そもそもこの刑務所の存在についてあまり知らなかった私にとってこの経験はとても刺激的なものであり、日本人として考えさせられるものがありました。

・最後に

今回の大会を通して、目的としていた内容について学ぶことができたのは勿論、韓国という国について、また、香港・韓国の友達が増えたこと、そしてICUの方々と仲良くなり、対話を重ねることで、様々な問題に対する法的な視点だけでなく、様々な視点から物事を柔軟に考えることができるようになりました。

そして、様々な人々に出会うことによって、たくさん刺激され、私にとって英語の会話力が最大の課題であると知ることができ、今後の学習の方向性が明確になったことが何よりも今回の大会に参加してよかったことだと感じています。

もし、来年も西南学院大学がこの大会に参加するのであれば、来年の参加者に私なりのアドバイスをしたいと考えています。

Model UPR に参加した感想

法学部国際関係法学科 1 年

23AM011 尾崎里奈

私の将来の夢は世界中で飢餓、紛争、貧困などで苦しんでいる人々を一人でも多く救いたいという思いがある。その中で、私が国際法を専攻したのは国際法という一つの世界の共通言語を学んで国際的な問題を法的な部分から解決策を見出していきたいという思いがあったからだ。

今回 UPR に参加して改めて人権の大切さを感じたと同時に、自分の意見・意思を持つことの大切さを感じた。今回は日本側の主張を ICU と西南の学生が担当した。ICU の学生は英語力が高いことももちろん、好奇心が旺盛で探求心が強く強弱と感じた。例えば、最終日の日本がかつて韓国を支配していたころの事実が表現された博物館に見学に行った際には日本では知らされていないような人間が人間に対してしてはいけないことを平気でしている日本人の衝撃的な姿・事実を目の前に ICU の学生は「人権とはなんなのか。戦争や紛争となると誰もが自国が優位に立つためなら人権を阻害するようなことを平気でできるのか。」と涙を浮かべ語った。また、フリータイムの際には普通だったら買い物や観光地に行こうとなる所だが、ICU の学生は現地のチャペルに行きたいと言った。ICU の学生はクリスチャンの学生が多いのもある。また、移動時の会話も単なる浅い話ではなく、一つの話についてそれぞれの角度から意見を出し合い深めることもした。日常ではなかなか味わえない仲間と知的能力を高めることができた。

また今回の会議には日本以外にも韓国・香港の学生が参加した。韓国・香港の学生は質問が一つ投げかけられたら二分間の返答の時間を余ることなく主張していた。また、自分の将来のビジョン設計をもち、強い意志をもっている学生が外にはこんなにもいることに刺激をうけた。また、日韓関係が悪化する中、私は現地の人々の日本に対する生の声を聞きたいと思った。そこで、私は韓国の学生に日本に対するイメージを聞いてみた。韓国の学生は「安倍総理の方針が嫌いなだけで、日本と日本人は嫌いではありません。」と答えてくれた。私はその言葉を聞いて少し安心したと同時に日本のメディアで伝えられることをうのみにするのではなく、実際に現地の人々の声に耳を傾けることの重要性を感じた。

今日、日韓関係が悪化する中不安を抱えながら挑んだ UPR はとても貴重な体験となった。実際にその空間の中で緊張感を抱えながらそれぞれの国の問題点、改善点を指摘しあうことはとても国の代表としての責任感を感じた。日本のことを知ることはもちろん、各国の状況・方針にも耳を傾けて理解することに努め、そのうえで、自分の意見・意思をもつことはとても大切なことだと感じた。

私は今回 UPR に参加して志の高い仲間との出会いがあった。このような仲間では国際的な問題に目を傾け、それぞれの意見を出し合い解決策や改善点を話し合うことはより具体的に考えが深まり、より実効的な案をつくることができると思う。

私はこのような機会に参加させてもらい自分の未熟さや改善点を見つけ、悔しい思いをした反面素晴らしい仲間との出会いもあった。自分自身が一歩踏み出すことは不安なこともあると思うがそれ以上に自分自身の視野を広げ考え方を豊かなものにしてくれる仲間との出会いや環境があると思う。私はこれからもたくさんの方にチャレンジし4年間で自己のアイデンティティを確立し、多様なことに対応できる柔軟性を身につけて、魅力的な人を目指したい。